

大平夫人全集 第五卷

岩波書店刊行

左千夫全集 第五卷

第五回配本(全八卷)

昭和五十二年四月十一日 發行 ©

定價三五〇〇圓

著 者 伊 藤 左 千 夫

發行者 岩 波 雄 二 郎

發行所 〒101 東京都千代田區一ツ橋千五
株式會社 岩 波 書 店

電話 (三十三) 六四二一
振替 東京六三六四〇

印刷・法令印刷 製本・三木舎

落丁本・亂丁本はお取替いたします

目次

非新自讃歌論……………	三
小隱子にこたふ……………	六
日本新聞に寄せて歌の定義を論ず……………	三
非地租増徴論……………	三
當陽川村某と云ふ人に物申さん……………	二四
樂人漫言……………	二六
内地雜居の營業的準備……………	三
象山先生の書……………	三
藤原久良岐ぬしへ……………	三
麓ぬしへ……………	三六
根岸短歌會と新派……………	三九
人に答ふ……………	四
露國の撤兵通牒……………	四五

嗚呼支那問題		四
歌に就きて吾今日の考		四
茶事漫録		五
新歌論		六
越ヶ谷の桃につき		九
擬墨汁一滴		九
子規子の近狀		九
兩子に答ふ		九
尋に一言		七
信綱氏の歌		八
光風君		九
命のあまりに就て		〇
續新歌論		〇
ジュウ的ぬた人		〇
長信短報		三
奥嶋曉雨君之歌		四

目 次

心の花評	二六
病牀日誌	二六
歌おどろ	二九
歳の壬寅に就て	二四
再び歌之連作趣味を論ず	二四
『心の花』短歌會記事一	二五
あわゆきがたり	二六
虚心平氣	二五
樂々漫草上	二七
『心の花』短歌會記事二	二七
『心の花』短歌會記事三	二七
樂々漫草下	二八
『心の花』短歌會記事四	二八
藪蚊言	二九
正岡子規君	二九
『心の花』短歌會記事五	二九

名古屋短歌會選評一	101
俱樂部欄の諸君に御相談あり	103
師を失ひたる吾々	104
『心の花』短歌會記事六	104
『心の花』短歌會記事七	113
名古屋短歌會選評二	116
名古屋短歌會選評三	117
『日本』選歌評	118
不言舍君に答ふ	119
『加持世界』選歌評	125
新年第一回歌會	126
花探し	131
根本的相違	136
塵觀片々	140
神樂催馬樂管見	143
名古屋短歌會選評四	147

名古屋短歌會選評	五
連作乃歌	二五七
受動的宗教家	二六〇
市川の桃花	二六六
第二十三通常會	二六七
『加持世界』選歌評	二七〇
名古屋短歌會選評	二七二
仁德天皇之御歌	二七七
閑人苦語	二九
萬葉論	三〇四
竹の里人	三三一
「しどみ」	三三四
『馬酔木』第二號消息	三三七
名古屋短歌會選評	三三八
竹の里人	三三三
日比谷公園合評	三三五

『馬酔木』第三號選歌附記	三六
新古今集愚考	三九
『鵜川』選歌評	三四九
『破魔弓』に寄す	三五二
竹乃里人三	三五三
今の所謂新派の歌を排す	三五六
『馬酔木』第五號消息	三七三
動作之趣味	三七五
「地方俳句界を読む」につき	三八二
軟脚の辯	三八四
萬葉私刪	三八五
展覽會に就て	三八六
落塵一掃	三八八
日比谷公園	三九一
第二十六通常會記事	三九四
芭蕉の肖像	三九六

草庵之秋	200
竹乃里人四	203
『馬酔木』第六號選歌評	207
新刊雜誌略評	208
森田義郎宛書簡	211
俗謡について	212
廣狹辨	210
『馬酔木』第七號選歌附記	211
筆のついで	213
『馬酔木』第七號消息	216
和讃評釋	218
『比牟呂』都波奈會選評	222
竹乃里人五	226
隨問答	222
『馬酔木』第八號消息	225
萬葉通解著言	228

萬葉集短歌通解 一—五	四五〇
『馬酔木』第九號消息	四七八
咨問課題答案	四七九
『馬酔木』第十號消息	四八三
『馬酔木』第十一號歌會記事前文	四八七
長塚節「海底問答」附言	四八八
課題答案一括	四八九
竹の里人 六	四九二
『竹の里人選歌』序	四九六
『竹の里人選歌』凡例	四九八
通 信	四九九
竹乃里人 七	五〇二
「歌の季に就て」に就て	五〇六
『馬酔木』第十二號選歌評	五一〇
『馬酔木』第十二號消息	五一二
「歌くづ八つ ほつま」歌評	五二二

竹の里人	八
書齋裝飾の仕方	五二〇
『馬酔木』第十三號選歌評	五二三
『馬酔木』第十三號選歌附記	五二五
『馬酔木』第十三號稟告	五二六
つばな會第九回の柿村舎歌評に就き	五二七
後 記	五三一

歌論・隨想
一

非新自讃歌論

物の數にもあらぬ歌人なれどあまりに腹立しければいでや少しく物まをさん あはれ日の本の名におふ新ふみの記者よ 記者が世のまつりごとの上にあげつらひ給ふ言の葉はいとも雄々しくすぐやかにして人により言をしりぞけず名により人を尊まず常にまさしく大やかに物し給ふは年頃おのれらが貴紙をおもむじ貴紙をうやまふゆゑよしなりしかるをけふしも貴紙にのする處の新自讃歌てふくだりをみれば其かみ後鳥羽院の御時の盛事になづらひ今の御代に名だかき歌人らの自讃歌十首づつをなんつぎ／＼と掲げ給はんとありこはいとうれしきわざなるが明治の歌壇其人に乏しからずとの給ひかつは明治聖世の歌壇しかく盛なるをなどいと輕ろげに言舉し給ふは日ごろのおごそかなるに似もやらでいと／＼あかず口をしうなんおもほゆるかし 記者のの給ふ如く今の歌壇果して其人に乏しからざるか 明治聖世の歌界果して後鳥羽院の御時のごと盛なりとたゞへらるべきか疑はしとも疑はしからずや 而も記者は廣く天が下に求めおごそかに撰み給ふことはせで只世にきこえたる人々にのみよりにて其歌をえんとし給ふはかへす／＼もあかず口をしうなんおぼゆるかし 時めけるかどにのみ歌つみ神はやどせるとおぼし給へるにやつぎ／＼のするらむ歌の如何なるべきやはえしらねど先其の頭にあげ給へる小出ぬしの歌のむげにいやしげなる口をしさよかうやうの歌を撰みおきていやさかえにさかえたる明治の大御代の歌なりと後の世に傳へ後の世の人にしめさんは今の世の歌人の耻のみにあらで實に大御代の耻にあらずや また世の

唐詩つくる人々俳句物し給ふ人々に和歌てふものはこれにてもよき物やなどおもひとられんも世の歌人の耻にあ
らでやはかれ歌てふもの今古の歌聖が教へのごと調をもとゝして心の句をあらはす者ぞされば心のみはいかに
うつしくいかにみやびなりとも調のとゝのはぬはいまだ歌とは云ひがたきなりまして心も調もいやしげなる
をいかで歌とはいふべき今小出ぬしの歌をみるに調の上には少しも味はふべき趣きなく心また雅に高きてふ氣
韻に乏し一々言あげせんは煩しければ今そが二三を言はんに「牛ひきかへるうしろかげ」「ふしかへるふすま」
「里はづれ」「車にのりしかひなかりけり」抔たふとき和歌の調かは舟子牛逐等がうたふてふ鼻うたの調子にこ
そ歌は心の句なれば今此十首の歌によりて小出ぬしの人がらを推しはかるにかたからぬぞ口をしき明治の大御
代の歌人として第一にゆび折らるゝぬしにしてかゝる歌を自讃歌と世にいださるゝこそいと悲しきことの極み
なれぬしは日ごろ達吟の聞えある人にしあればおほ方の世に異なれる節を求むるのあまりかゝる横道には入り
給ひけん返すゝいとをしきことにこそ凡世の中の萬の物事美醜あり雅俗ありそをとり捨ててこそ美術てふ
物もいでくめれ醜くきものいやしげなるものうちまじりなばそは美術てふ物の界にいるべきにあらず故にいや
しげなる調とみやびならぬ心とはいづれか一つまじらひては即歌にはあらじかし歌の俳句にことなる所は心の
外に調をおもむずるにあなり去ば歌にして調なきはこれ直に俳句なり文字の長し短をもて歌俳を分つは歌俳を
しらざる人の上にこそ歌は心と調と兩ながらまたきを要するぞかしこれと和歌の俳句よりかたきゆゑよしにして
和歌の俳句よりたふときゆゑよしなりたゞ／＼思ひいづるまゝを三十一文字につくればとて直ちに歌ならんや
はいやしき心みにくき物ごとを其のまゝうたひたりとて俳句にもならぬものをいかで和歌になるべきや香川ぬ
してふ古のあやしき歌よみが「それそこに豆腐のこゑのきこゆなる」などといひて後の世幾萬の人を惑はしたる